

事例2

個に応じた「読むこと」の指導

―二年「走れメロス」から―

新しい授業を考える会

一 はじめに

新学習指導要領の完全実施により、国語科の時数は各学年とも三十五時間減となりました。また、評価も相対評価から目標に準拠した評価、いわゆる絶対評価になり、国語科の教師は、限られた時間の中で、生徒一人一人の学習目標の実現の度合いを評価していかななくてはならなくなりました。このことにより、教師が授業のあり方を根本から考え直し、生徒一人一人を大切にした授業を行う必要があります。

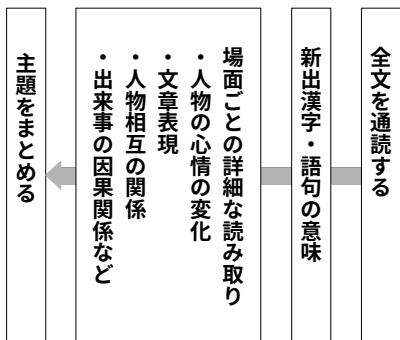
二 生徒の実態をどうみるか

わたしは、四月の最初の授業で、各自に「国語の自己診断」（資料1）をさせます。まずは、これまでの自分を振り返り、自分がわかっていること、わかっていないことを意識づけさせます。そして、それぞれの生徒は、

三 生徒の実態に即した指導をどう行うか

①ねらいを絞った指導計画

これまでの国語の授業といえば、例えば文学的な文章の場合、



という流れで進めることが多いと思います。教師は、あれもこれも教えようと、一つの教材に、六時間も七時間もかけていました。しかし、新教育課程ではそこまで時間をかけることはできません。したがって、その教材を使って、生徒にどんな力をつけさせたいか（指導のねらい）をきちんと決めて、それに絞った指導計画を立てる必要があります。

何ができるのか、わからないのかを教師が把握します。授業では、一つのねらいに対し、たいてい三～五時間を充てますので、初めの一、二時間で、生徒の様子をつかんでいきます。その際、授業では、きちんとねらいを示すことが大切です。この時間、この教材でどのような力を身につければよいかを生徒がわかって学習することはとても大切なことです。生徒の実態をつかむには、ワークシートをうまく活用できると思います。ワークシートを点検することで、個々の様子がだいぶわかってくると思います。

資料1「国語の自己診断」例

②ねらいの実現のためにどのような学習活動を行うか

次に、そのねらいの実現のために、どのような学習活動を展開するかを考えなくてはなりません。国語の授業では、教師が中心となって進めてしまいがちですが、ワークシートのような、目に見える形の教材を使い、まず生徒一人一人の取り組みの様子を把握し、そして、どれだけわかっているのかを見ていかななくてはなりません。例えば、「走れメロス」を使って登場人物の心情を読み取る学習を行うとき、人物をメロスとデイオニスの二人に絞り、行動や言動の記述から心情が読み取れることを確認し、実際にその作業をさせていきます。そして、生徒個々の作業の合間に、教師は机間指導を行うことができます。ここで、ワークシートの埋まり具合を見ながら、生徒一人一人にいろいろと指導、助言を行っていきます。

③学習したことを活用してみる

②での取り組みの後、同じようなやり方をしながら、別の場面ですらに練習を繰り返します。生徒は一度取り組んでいますので、それを参考にしながら別の場面について同じように考えていくのです。この段階では、もしわからないことが出てきても、いきなり教師に質問するのではなく、周りの友達との交流から自分なりの答えを

